



Data

監督・脚本: パヴェウ・パヴリコフ
スキ

出演: ヨアンナ・クーリク/トマシ
ユ・コット/アガタ・クレシ
ヤ/ボリス・シツ/ジャン
ヌ・バリバル/セドリッ
ク・カーン/アダム・フェレ
ンツィ/アダム・ポロノビチ

👁️👁️ みどころ

東西冷戦は「米ソ」間や「東西ベルリン」間だけではなくポーランドでも！陳凱歌（チェン・カイコー）監督の名作『黄色い大地』（84年）と同じような、新国家建設のための民謡の掘り起こし任務から始まる導入部は興味津々。これは、中国の「文芸工作団」員の青春群像劇だった馮小剛（フォン・シャオガン）監督の名作『芳华』（17年）にも通じるものが・・・。

そう思ったが、本作のメインはパヴェウ・パヴリコフスキ監督の両親をモデルにしたという、国立舞踊団に属する男と女の「COLD WAR」を越え、国境を越えた激しい恋物語。亡命はそれ自体大変なことで、1度決行すれば十分だが、スクリーン上に見る2人は・・・？

正方形に近いモノクロ映像で88分の長さだが、中身の充実度はピカイチ。多くの受賞も当然の本作は、こりゃ必見！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■中国は文工団！ポーランドは国立の舞踊団！■□■

去る5月15日に観た馮小剛（フォン・シャオガン）監督の『芳华』（17年）は文芸工作団（文工団）に集まった若い男女の、文化大革命という激動の時代（1966～77年）における青春群像劇だった。文芸工作団は人民解放軍の部隊の1つで、兵士の士気高揚のために慰問したり党の政策の宣伝を行う歌舞団や劇団だが、文化大革命が始まった1966年から70年代にかけては男女を問わず中国の若者たちにとって、この文工団に入るの、日本の若い女の子が宝塚歌劇団に入団するのと同じように大きな憧れだったらしい。

国を運営していくためには、国立の舞踊団が不可欠。そう考えたのは、1949年10

月1日に建国された中華人民共和国だけではなく、ポーランドも同じだったらしい。そのため、1949年のポーランドでは、管理部長のカチマレク（ボリス・シツ）、ピアニストのヴィクトル（トマシュ・コット）、ダンス教師のイレーナ（アガタ・クレシヤ）の3人が民族音楽を集め、歌唱力とダンスの才能に恵まれた少年少女を探し、国立のマズレク舞踊団を立ち上げるという国家から与えられた任務を果たすべく、村から村へと歩いていた。そのためには、まず養成所の立ち上げが不可欠。その呼びかけに応募した多くの若者の中に、エネルギーに満ちた眼差しの少女ズーラ（ヨアンナ・クーリク）がいた。ヴィクトルはその魅力にぞっこんだが、イレーナはかなり消極的。その理由は、彼女は「父親殺しで執行猶予中」という問題児だかららしい。日本の宝塚では、毎年4月に宝塚音楽学校に約40人の新入生が誕生するが、さて、1949年のポーランドで新たに立ち上げた国立の舞踊団養成所にズーラは入っているの？ちなみに、1984年に「中国映画のニューウェーブここにあり！」と全世界に発信した陳凱歌（チェン・カイコー）監督のデビュー作たる『黄色い大地』（84年）では、毛沢東率いる中国共産党の八路軍から、兵士を鼓舞するため中国の民謡を採集するという任務を与えられた文芸隊員の顧青が主人公だった（『シネマ5』63頁）が、本作の主人公はあくまでズーラだ。中国は建国の日から様々な苦難の道を歩んだが、さてポーランドは？そして、そんな苦難の歩みの中、晴れて国立舞踊団の団員となったズーラの生きざまは？

■□■清く正しく美しくはポーランドではムリ？■□■

1913年に設立された宝塚音楽学校は2013年に創立100周年を迎えたが、太平洋戦争中に大変な苦労があったことは、藤原紀香らが主演した2002年のTVドラマ『愛と青春の宝塚～恋よりも生命よりも～』を観ればよくわかる。同校の「清く正しく美しく」という校訓は有名だが、ポーランドで1949年に創設された国立舞踊団のそれは？宝塚の入団者は女性ばかりだから文字通り“女の園”だが、中国の文工団も、ポーランドの国立舞踊団も男女混合だから、団員同士の恋愛は避けがたい。『芳華』はその青春群像劇を見事に描いていたが、本作のズーラは何とピアニストのヴィクトルとデキてしまっていたから、アレレ・・・。

はじめてズーラを見た時からその才能を見抜くとともに、何とも大胆で大人びた（不良じみた？）雰囲気惹かれていたヴィクトルは、本来踏み込んでほならないプライベートな事項である、ズーラの父親殺しについて「お父さんと何が？」と尋ねてしまったが、それに対してズーラは平然と真相を話したうえ、「私に興味が？それとも私の才能に？」と聞き返してきたからすごい。こりゃ完全に、年上で教師のヴィクトルより、年下で生徒のズーラの方が上手だ。そんな力関係（？）の中で2人の肉体関係を含む男女の仲が続いていたが、後に実はズーラはカチマレクの命令によってヴィクトルのことを密告していたと告白したから、話はややこしい。西側の放送を聴くか、神を信じているか等と聞かれたズー

ラは、執行猶予中であるためカチマレクの命令に従うしかなかったそうだが、ズーラはなぜそんなことをシャーシャーとヴィクトルに語るの？

スターリンが1934年に提唱し、芸術の唯一の正しい方向性と定めた“社会主義リアリズム”に沿って立ち上げられた国立舞踊団の初公演は大成功で、政府高官からも称賛されたが、舞踊団の中でのこんな不倫沙汰は如何なもの・・・？そう思っていたが、ヴィクトルは西側の音楽を捨てられないため、西側への亡命を考えていたようだから、不倫問題よりもそちらの方が重大だ。5月20日に観た『ホワイト・クロウ 伝説のダンサー』（18年）では、天才バレリーナのヌレエフは何とかソ連からパリへの亡命を成功させていたが、さてヴィクトルの亡命の成否は・・・？

■□■ 好評価で満席だが、難解！冷戦の意味をしっかりと！ ■□■

最近、映画館が満席になることは少ないが、本作は満席だった。また、新聞紙上での事前の評価も非常に高かった。本作は第91回アカデミー賞、監督賞・撮影賞・外国語映画賞にノミネートされた名作だから、それは当然かもしれないが、『COLD WAR』というタイトルからわかるように、本作は実は難解！チラシには「冷戦下のポーランドで恋に落ち、時代に引き裂かれたピアニストと歌手」と書かれており、予告編を観るとズーラが歌う「Dwa Serduszka（2つの心）」の美しい曲が印象的で強く耳に残る。しかし、ヴィクトルとズーラの恋の遍歴はまさに「冷戦下のポーランドでの恋」と「時代に引き裂かれた2人」だから、実に劇的だ。『ホワイト・クロウ 伝説のダンサー』はソ連からパリへの亡命が成功した時点で物語が終了したが、本作はそうではなく、ヴィクトルが（1人で）無事にポーランドからパリへ亡命した後も2人の恋は行きつ戻りつしながら続くので、それにも注目！また、本作はミュージカル映画ではないが、『黄色い大地』に多くの民謡が登場したのと同じように、本作も多くの民族音楽と民族舞踊が登場するので、それにも注目！

なお、本作のパンフレットには、久山宏一氏（ポーランド広報文化センター）の「音楽と舞踊でたどる冷戦史」と題する5ページにわたる年表入りのコラムがあるから、これは必読。『僕たちは希望という名の列車に乗った』（18年）では、ベルリンに東西の壁が建設される直前の東西ドイツの対立と、その中で揺れ動く高校生たちとの気持ちを興味深く知ることができたが、本作では、①「冷戦」前史、②1949～64年のポーランド芸術（音楽と舞踊を中心に）、③1952年の東ベルリン、④1954年のパリ、⑤1955年のユーゴスラビア、⑥1957年のパリ、という時系列にしたがって「COLD WAR」と「2人の恋模様」を知ることができる。もっとも、それをしっかりと知るためには、このコラムの読破はもちろん、多くの勉強が必要だ。

■□■なぜ今ドキ、正方形に近いモノクロ映像で？ ■□■

映画は19世紀末にフランスのリュミエールが発明したシネマトグラフに始まったが、

その後サイレントからトーキーに移行し、スクリーンもシネマスコープ、70mmと大型化し、総天然色（カラー）が主流になっていった。今ドキの邦画のほとんどは明るい大型スクリーンで美しい色彩のものばかりだが、そうなると、逆に陰と陽の対比の面白さが損なわれている面もある。黒澤明監督の名作のほとんどはモノクロ映像だが、それでも今なお色あせないのは一体なぜ？また、近時4Kデジタルリマスター版で次々と公開されている過去の名作はすべてワイドスクリーンではなく正方形に近いスクリーンだが、それでも十分楽しめるのは一体なぜ？

現在のポーランドの映画製作の技術レベルがどのレベルなのかは知らないが、本作の脚本を書き、監督したパヴェウ・パヴリコフスキは前作の『イーダ』（13年）（『シネマ33』81頁）に続いて、本作を正方形に近い1：1.33のアスペクト比のスクリーンによるモノクロ映像で撮っている。1957年にポーランドのワルシャワに生まれた彼は14歳の時に母親に連れられてポーランドを出て、イギリス、ドイツ、イタリアへと渡り、最終的に1977年にイギリスで落ち着いたそうだから、『仄とダイヤモンド』（58年）（『シネマ43』360頁）等で有名なポーランドのアンジェイ・ワイダ監督のように、ずっとポーランドで活動続けてきた監督とは異質だ。

歌って踊って楽しいミュージカル映画といえば、最近では『ラ・ラ・ランド』（16年）（『シネマ39』10頁）がその代表。そんな映画には、横長の大型スクリーンで美しい色彩の明るい映像がピッタリだ。しかし、『COLD WAR』と題された本作のような映画には、やっぱり正方形に近いモノクロ映像がピッタリ・・・？難解だった『イーダ』と同じように、本作も難解。そして、『黄色い大地』と同じような「ミュージカル映画」の側面を持っているものの、正方形に近いモノクロ映像ではそれを底抜けに楽しむことはできず、あくまで暗く陰鬱な印象を伴っている。そのことの良し悪しを含めて、本作ではそんな正方形に近いモノクロ映像に注目！

■□■ どうみても女性上位！本作のモデルは実は・・・ ■□■

『僕たちは希望という名の列車に乗った』では、主人公になった2人の高校生が1956年のハンガリー動乱の様子をニュース映画で見たことが波乱の物語の端緒になっていた。しかし、東欧の歴史に特に疎い日本人は、1956年のハンガリー動乱を知らなければ、本作に登場する1955年のユーゴスラビアにおけるチトー政権vsソ連のスターリン政権との対立も知らないはずだ。本作前半のハイライトは、1951年にワルシャワで熱く燃え上がったズーラとヴィクトルの2人が、1952年の「国際青年祭」で招かれた東ベルリンでの公演を利用して西ベルリンへの亡命をはかる物語。『僕たちは希望という名の列車に乗った』で描かれたとおり、この当時はベルリンの壁が建設される前でそれなりに東西ベルリンの往来は自由だったから、2人の意思が合致さえすれば亡命は可能だ。しかして、手はずどおりヴィクトルは所定の場所で待っていたが、結局ズーラが現れなかったため、

やむなくヴィクトルは1人だけで亡命を決行！しかし、なぜズーラはヴィクトルに対してそんな重大な背信行為を・・・？

以降、前述した久山宏一氏のコラムにあるとおりの時系列に沿って、2人の切れそうで切れない恋の遍歴が続いていくが、それを見ていると危なっかしいことこの上ない。そして、比較的往来の自由な国ユーゴスラビアでヴィクトルがズーラの歌を聴いていた時、彼はそこで国家保安局の男たちに逮捕されてしまったからアレレ。こうなれば、いくら何でも2人の恋は切れてしまうはず。そう思ったが、現実は何の何の・・・？

本作ラストには、じいさん、ばあさんになった2人が登場し、孫たちと丁々発止のきわどい会話を交わすシークエンスが登場するので、それに注目だが、実は本作のヴィクトルとズーラはパヴェウ・パヴリコフスキ監督の実の両親がモデルになっているらしい。冷戦の時代に国境を越えて、また逮捕、収監の壁を越えて続いた2人の恋物語はとにかく波乱万丈だが、それを引っ張っているのはどうみても男のヴィクトルの方ではなく、女のズーラの方、つまり女性上位だ。ズーラを演じたヨアンナ・クーリクの名演技に拍手を送りつつ、『COLD WAR あの歌、2つの心』と題された本作のストーリーと音楽の素晴らしさを堪能したい。

2019（令和元）年7月4日記